2026日本家庭科教育学会中国地区会

家政教育学研究と教育実践の足跡と展望

2026 0829
於：広島女学院大学



元広島大学　　鈴 木 明 子
suzuaki@hiroshima-u.ac.jp

広島大学

1

本日のお話

広島大学

Ⅰ　研究の足跡
- 1．布を用いた製作学習で育む資質・能力
- 2．家庭科の教科観と資質・能力
- 3．家庭科教師に求められる力と教師教育の展望

Ⅱ　未来志向の生活創造に向けて
- 1．「生活主体」の育成と家政教育で育てる資質・能力
- 2．　家政教育学の役割と展望

2

広島大学

Ⅰ　研究の足跡

1．布を用いた製作学習で育む資質・能力
2．家庭科の教科観と資質・能力
3．家庭科教師に求められる力と教師教育の展望

3

広島大学

1．布を用いた製作学習で育む資質・能力

（1）小学生・中学生のものづくりへの意識
（2）自己効力感の向上を目指す指導の方向
（3）保護者の意識にみる家庭科製作学習の意義

4

広島大学

2．家庭科の教科観と資質・能力

（0）はじめに
（1）家庭科の教科観を明確にすること
（2）家庭科の題材やパフォーマンス課題は子どもにとってリアルでオーセンティックであること
（3）学びの文脈を重視した家庭科カリキュラム

5

広島大学

3．　家庭科教師に求められる力と教師教育の展望

（0）はじめに
（1）教師に求められる資質・能力の再整理と教職課程の見直しからみえてくること
（2）家庭科教師に求められる力
（3）これからの教員養成の展望

6

広島大学

Ⅱ　未来志向の生活創造に向けて

1．「生活主体」の育成と家政教育で育てる資質・能力
2．　家政教育学の役割と展望

7

広島大学

1．「生活主体」の育成と家政教育で育てる資質・能力

（1）家政教育の中の家庭科教育
（2）生活主体の育成
（3）家政学にみる「生活主体」
（4）国際家政学会(以下，IFHE）における「生活主体」
（5）未来の生活者に必要なコンピテンシー追究における課題

8

（1）家政教育の中の家庭科教育

広島大学

家政教育を学校教育の場で展開している家庭科は，戦後設立された時点から，認識的にも技能的にも自立し主体性をもってよりよい生活を工夫し実践できる生活者を育てる教科として，教育課程に位置づいてきた。しかしながら，戦後80年余の社会の変化，生活の変化，教育課程の変化の中で，家庭科ほど教科の方向性，教科内容が揺れ動いた教科は他にはないであろう。常に「予測困難な生活の変化」に晒されながら，教科の本質を問うことを余儀なくされてきた教科だともいえる。そのような特徴をもつ家庭科という教科の存在は，現在の教育課程において汎用的な資質・能力が問われる中でも変わらず重要であり，「学び続ける主体」の育成を多様な側面（認知面，情意面，行動実践面）から支える役割を担っている。

9

（2）生活主体の育成

広島大学

家庭科では「生活主体」を育てることが，教科目標である「生活自立」及び「個々のライフスタイルの創造」には不可欠であるとともに，その学習プロセスにおいては，「学び続ける主体」であることが必然である。

それは，家政教育においても同様である。家庭科の背景学問として教科理論への示唆を与えてくれる家政学における「生活主体」の捉え方と，「生活主体」としての生涯発達について述べる。そのうえで，「学び続ける主体」を支える家政教育のカリキュラムの課題と方向性を探る。

10

「主体的な学び」は，「対話的な学び」とともに，それを充実させることによって，一連の問題解決的な学習過程の中で「深い学び」につながり，「生活をよりよくしようと工夫する資質・能力」が育まれる。「主体的・対話的で深い学び」の実現は，自分自身の現在及び将来の生活に目を向け，それに積極的に関わり続ける主体を育てるために重要である。その中でも「主体的学び」は，学ぶことに興味や関心をもち，見通しをもって粘り強く取り組み，自己の学習活動を振り返って次につなぐという態度形成に関わる重要な資質・能力である。

家政教育の「主体的な学び」は，生涯発達という時間軸，身近な生活から社会環境や自然環境に至る広がりをもった空間軸の認識の中で，「生活主体」としての自覚と発達を促すとともに，主体的な社会の形成者となるための汎用的な資質・能力としての「主体的に学ぼうとする力」を支えることにもつながる。換言すれば，家庭科と同様に家政教育でも「生活主体」の在り方を問い，「生活主体」を育成することは，「学び続ける主体」の育成において，課題を自分事として捉えることを容易にし，学びへの動機付けや学習意欲の喚起につながる。さらには，次の学習への意欲を高めるという，学習に向かう態度形成に寄与する。

11

（3）家政学にみる「生活主体」

広島大学

家政学は，家庭科の背景学問とも称されるが，日本においては家政学の研究成果が家庭科教育に生かされている面がある一方で，「総合科学」の捉え方の面で様々な議論もみられる。日本の家政学の定義は，1984 年に「家政学将来構想 1984 家政学将来構想特別委員会報告書」（日本家政学会1984）において示された。一方で，国際家政学会による“IFHE Position Statement-Home Economics in the 21st Century”(第 21 回 世界大会2008)の提起や，国内でも日本学術会議による「分野別参照基準」作成を契機に専門分野の定義について議論が再燃している。日本家政学会家政学原論部会は，「家政学的研究ガイドライン〔第一次案〕」の中で，その定義を「家政学は，自然・社会・人文の諸科学を基盤として，家庭を中心とした人間生活に関する諸法則を明らかにし，実生活に役立つ研究をする実践科学であり，総合科学である。」としている。

12

このような生活を研究対象とする家政学において，「生活者」や「生活主体」の捉え方が，多くの研究者によって追究されてきた。「生活者」は，日本独自の言葉であり，生活者論を唱えた三木清は，「生活への自主的，積極的，創造的態度こそ生活文化である」とし，生活文化を創る生活者に求められる態度を示唆している。

志村（2020）は，家政学におけるこのような「生活主体」に係る言及をまとめて，「『生活を主体的に営む変革主体』（松葉口 2000）は，家政学において従来から課題として挙げられ，特に産業化とともに脆弱化している「生活主体」の育成が求められている。」としている。また，「生活主体」としての人間の発達は総合的なものであり，出生時から高齢期に至るまで継続している。家政学における人間発達とは，個人・家族が「生活主体」として一生を通して発達していく過程，またはその考え方を指すと捉えられている。

13

（4）国際家政学会（以下，IFHE）における「生活主体」

現在のIFHEの理念や立場を提示しているPosition Statement 2008では，まず家政学の4つの基本的な特質のひとつに以下の文言が記されている。「家政学は社会のあらゆる分野の個人や家族，コミュニティを擁護し，そのウェルビーイングを高めるための批判的，変革的，開放的な活動を展開する可能性を有する分野である。」また，家政学が追究し実践する領域として，「専門的な学問探究の領域」及び「日常生活の充足の領域」の2点に加え，「カリキュラムにおいて生徒が自らの資源や能力を発見して生活に活用し，将来の生活運営や職業選択へとつなげる力を育てる教育的領域」及び「個人，家族，コミュニティをエンパワーし福祉を向上させ，持続可能な未来を創る政策を促進し影響を与える社会的領域」の2点が挙げられている。

これらのことからIFHEは，家政学を，生活の課題に取り組み，その解決に寄与する学問領域であるとともに実践の場であると捉えていることがわかる。同時に，社会の政策決定に生活の場から影響力を行使するとともに，教育面においても，生活の主体育成を促すカリキュラムを提供する領域と捉えていると解釈することができる。

14

（5）未来の生活者に必要なコンピテンシー追究における課題

Education2030プロジェクトは，望ましい未来の在り方について議論を行ってきた。それまでのコンピテンシーに関する議論の焦点は，雇用可能性や生産性といった社会経済の在り方に対応していくために，どのような力が求められるかが検討の中心課題であった。そのような変動する社会にどのように対応していくかといった受け身の議論ではなく，どのような社会を創っていくかという能動的な議論によって，我々が育てる能力を追求していく必要がある。受動的姿勢から能動的姿勢へ，エージェンシーの理念を用いて，個々のウェルビーイングのアプローチすることの重要性は，家政学における実践の価値とつながるものである。

15

広島大学

2. 家政教育学の役割と展望

（1）家政教育学研究の課題
（2）「学び続ける主体」の育成を支える家政教育の展望

16

（1）家政教育学研究の課題

いずれの教科においても，生活事象を教材やモチーフとして扱うことは可能であり，生活の中から各教科にかかわる課題をみつけたり，その課題解決に向けて学びを深めたりすることはできる。しかしながら，家庭科では，そのような断片的な生活要素の学びを活用し俯瞰して生活全体を捉え，自身の生活価値や行動を見つめて創造していくことこそ重要であり，そのような展開が求められる。それを可能にする能力が家庭科独自のコンピテンシーであり，それを育むことが家庭科の使命である。このことは，家政教育における他の2つの教育の場，家庭教育，社会教育にも影響を及ぼす。

17

家政教育学研究の在り方を考える時，そのフィールド，研究対象を，学校教育，家庭教育，社会教育それぞれの場に限定した研究であっても，その課題設定や研究成果の発信の際に，この3つの場を意識することが必要である。家政教育で育むコンピテンシー追究のために，家政教育学研究及び家庭科教育研究には次の4つの課題が挙げられる。

これらは，家政教育に携わる教育者の資質を保障し，家政学の定義や目標，家庭科という教科の目標構造や学習内容の体系，さらには学習観や教授方略を再考することにも役立つと考える

18

1. 生活の成り立ちとその変化を捉える視点をもつこと，生活者育成に係る学問の独自性と教科の枠組みの重要性を理解すること。
2. 家政学と関連専門諸科学との関係性に基づき，家政教育や家庭科教育の内容は学問ベースで構成されていることを理解し，その教育の意義を説明できること。
3. 家政学と家庭科教育の関係，及び教科教育と教科内容の架橋原理を探るため，家政学原論，家庭科教育学，教科内容学担当者の三者がそれぞれの専門性や研究実績に基づき協働すること。理論と実践成果に関する意見や情報を共有しつつ協議すること。
4. 家政教育及び家庭科教育の意義を，当該学問及び教科の本質とコンピテンシーとの関係において追究し，生涯を通して生活者や家庭科教師を支援するための教育環境の提案を行う

19

(2)「学び続ける主体」の育成を支える家政教育の展望

家政教育で育成する資質・能力は，「生活主体」としての成長，発達に資するものとして捉えることができる。それは，主体性，積極性，創造性や行動，実践力によって支えられ，多様で複雑な情報を自分なりの文脈で整理し，意思決定できる力でもある。その指導においては，「生活主体」としての自立を生涯にわたって確立していくための資質・能力の育成を担う役割があることを意識し，家庭教育，学校教育，社会教育において発達段階に応じた工夫を行うことが求められる。

20

そのために，教師自身，研究者自身が「生活主体」としての豊かで柔軟な感覚を「生活主体」として磨いていくことが求められる。それは，生活知を，科学知と同様に教育価値及び文化価値のあるものとして捉えることに役立つ。生活者として積極的に生活知と科学知の間を往還することによって，学びを本物にしたり，生活知の在り方を再考したりすることにつながる。

身近な生活と向き合って感じる「自分だけの思い」を大切にして，生活を考える「問い」を立てることにつなげることができれば，「実践的・体験的学習」は，ただ技能やスキルを身に付けるだけの場ではなくなるであろう。生活者としての自分や自分の生活を覗き，「生活主体」としての足場作りを可能にするこのような学びを重視する中で，技能習得のレベルや完成度の評価が，家庭科の「生活主体」を育てる学びの一側面でしかないことに気付かされる。

また，このような主体性感覚をもたせるだけではなく，それを多様な文化や他者の感覚とすり合わせて，「生活主体」としての自己のあり方を客観的にとらえる場面も必要である。

21

「学び続ける主体」の育成を，家庭科は「生活主体」を育成することによって支えている。また，同時に，教育課程全体で「学び続ける主体」を育てることによって，子供たちが主体的に学ぶ意義やそのスキルを修得すれば，家政教育の「生活主体」としての学びに還元されるであろう。

科学技術や経済の発展を追い求めるだけでは人類の発展は行き詰まることを，我々は感じざるを得ない。

一人一人が全体に作用する主体であるという自覚をもって，身近な環境（人，もの，こと）への働きかけを行い，システム思考で意思決定していくことの必要性と重要性を家政教育学研究及び家庭科教育学研究を通して発信し続けていきたい。

22

主な引用・参考文献

- 鈴木明子．(2017)．家庭科の資質・能力形成におけるカリキュラム水準の文脈づくりの意義，コンピテンシー・ベイスの授業づくりーコンテクストをどうつくるか，指導と評価，(3)，59-61．
- 鈴木明子．(2019)．コンピテンシー・ベイスの家庭科カリキュラム，東京：東洋館出版社，34-39．
- C.ファデル・M.ビアリック・B.トリリング．(2016)．21世紀の学習者と教育の4つの次元―知識，スキル，人間性，そしてメタ学習―．京都：北大路書房．
- 中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28 年12月21日
- G.ウィギンス・J.マクタイ，西岡加名恵訳．(2012)．理解をもたらすカリキュラム設計ー「逆向き設計」の理論と方法．東京：日本標準．
- 本田由紀．(2020)．教育は何を評価してきたのか．東京：岩波書店．
- 石井英真．(2015)．現代アメリカにおける学力形成論の展開ースタンダードに基づくカリキュラムの設計ー．東京：東信堂．
- (一社) 日本家政学会(2023) 日本家政学会のSDCsポジションステートメ ント2023年5月27日

23

- Margarete M. Bubolz・Joanne B. Eicher・M. Suzanne Sontag. A Human Ecosystem Illustrating the Near HBE, HCE, and NE. The Human Ecosystem: A Model, *J. Home Economics*. Spring 1979, 28-31．
- 松尾知明．(2016)．未来を拓く資質・能力と新しい教育課程 求められる学びのカリキュラム・マネジメント．東京：学事出版．
- 松尾知明．(2017)．21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革．国立教育政策研究所紀要，(146)，9-22．
- 松下佳代．(2010)．〈新しい能力〉は教育を変えるかー学力・リテラシー・コンピテンシー．京都：ミネルヴァ書房．
- 松下佳代．(2010)．教育におけるコンピテンシーとは何かーその本質的特徴と三重モデルー．京都大学高等教育研究，(27)，84-108．
- 奈須正裕．(2017)．資質・能力と学びのメカニズム．東京：東洋館出版社．
- 白井俊．(2020)．OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー，資質・能力とカリキュラム．京都：ミネルヴァ書房．
- 住田和子．(2003)．生活と教育をつなぐ人間学ー思想と実践ー．東京：開隆堂出版

24